

小出 博 著

日本の河川研究

本書は377ページに及ぶ大書であるが、そのうち利根川に関する考察が1/4以上におたっている。著者が利根川に最も重点をおいていることがうかがわれる。利根川についての著作は栗原良輔の「利根川治水史」根岸門蔵の「利根川治水考」、吉田東伍の「利根川治水論考」、河田薫の「考証利根川流域沿革考」など、著名なものが多い。すべての文献が江戸幕府は文称3年の会の川締切りから出発して、利根川の流域を変えて銚子におとす構想があったとしている。その目的が、江戸の治水対策、舟運、軍事上の防備として、赤堀川の開削がきわめて重要な意義をもち、その後の利根川治水方向を決定したものとされてきた。

本書はそれらの論理の中から、いくつかの問題点を指摘しながら、利根川治水策が当初から東遷の意向のもとに行なわれ、この方向のうえに明治以降、現在までの利根川治水の基本があることに疑問を投げかけている。そこで、利根川改修の一つ一つの出来事をていねいに考察して、第一次から第二次の変遷を経て利根川を東へおといつめ、閑宿に至って、江戸幕府の利根川政策に大きな混乱が生じたのではないかと推論する。ひたすら利根川を東遷して銚子におとすことを前提として近代合理主義的な説明をしようとした研究者の混乱の再生産が無理な治

水史を生みだしたと主張する。そして、新しい利根川治水史を描きだし、江戸時代からの利根川治水の問題点を理解しようと試みている。しかし、明治以降の利根川治水策が、どう混乱し、どのような試行錯誤を繰り返したかについては不十分であろう。江戸時代以来、現在までに至る利根川政策が、なお解明されていないという感じをめぐいきれない。計画高水流量が改修計画で3750 m³/sec、改訂計画で5570 m³/sec、増補計画で10000 m³/sec、さらに改修改訂計画の17000 m³/sec、現在計画26500 m³/secの意義は、どう理解され、検討されるべきなのだろうか。明治29年の河川法制定以来、低水工事から高水工事への移行が明治政府の利根川対策の基本的な姿勢とみてよいのだろうか、解答はない。しかし、明治以降の不十分さは、問題を発展させる礎をきざいた点で、なんら本書の価値をさげるものではない。

本書は、先に刊行された「日本の河川自然史と社会史」の各論に相当する「地域性と個性が河川の自然史を決定づけ、自然史は社会史を方向づける。そして社会史は自然史を反映する」という構成のもとに論述されている。単なる地誌ではなく、また、ハンドブックのようなものでもない。

土木界からこうした書物が出なかったことに問題があるろう。本書を今後どう発展させるかに河川工学、あるいは河川開発論の重要な課題が提起されていると見られよう。本書を読みこなすのは容易なことではない。

[M]

東大出版会刊、B5判・377ページ、定価4200円、
昭和47年5月29日受付。

国鉄施設局土木課 監修
国鉄防災100年史編纂会 編

鉄 路 の 闘 い 100 年

— 鉄 道 防 災 物 語 —

わが国の鉄道は地質、地形、気象条件のきびしい国土に綱の目のように建設され、豪雨、豪雪、地震などにより災害を受けやすい条件のもとにおかれている。本書は国鉄の第一線の現場で防災の仕事に携わっている技術者がいかに災害に対処し、復旧に努力しているかを体験に基づいて記述したものである。本書には、地すべり、土砂崩壊、なだれ、洪水などによって発生した災害の体験、豪雨、豪雪時に起こりうる災害を予測し、異常事態の発生を発見するための見張作業、一刻も早く開通させるための不眠不休の復旧作業や、災害を防止するための防雪林や飛砂防止林の造林の苦勞などが記録されている。

日本全国いたるところに災害危険地域があることに改めて驚かされるが、このような状況のもとで鉄道防災に従事している技術者がいかに献身的な働きをしているかが知らされる。また、地すべり、土砂崩壊、なだれなど自然現象を防止することはできないが、細心の注意を払うことによりこれらの現象の発生を予測し、人命に及ぶ災害を未然に防ぐことができることが数多くの実例をもって示されている。災害から守られるべき者と守る者とは分離され、配慮のいきとどいた防災対策がたてられず、災害を著しくしている事例が多く指摘され、防災に対する考え方が問題とされている現在、本書に記録された災害が起こることを前提にした、献身的な防災に対する取り組み方は各方面で検討される価値があるであろう。

[S]

山海堂刊、B6判・330ページ、定価500円、昭和47年8月25日受付。